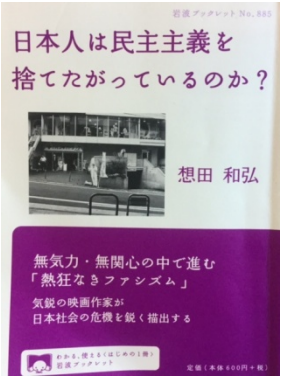
熱狂なきファシズム



写真はニューヨーク在住の映画監督・想田和弘さんによる2013年刊行の岩波ブックレット885号。5年前にも読んだが、久しぶりに再読し、なんだか引き込まれるものがあった。ますます劣化する日本の政治を見ていると、標題の本書タイトルについて考えることが多い。本書目次は下記の通り。

第1章 言葉が「支配」するもの―橋下支持の「謎」を追う

第2章 安倍政権を支えているのは誰なのか？

第3章 「熱狂なきファシズム」にどう抵抗するか

第1・2章も興味深いが、ここでは第3章の一部を紹介したい。なぜ、こんなに酷い安倍政権が長持ちするのか、その「謎」を探るために。

ファシズムといえば、「カリスマ的指導者に煽動された大衆が熱狂的に進行させるもの」というイメージが根強いのではないでしょうか。橋下徹氏の台頭は、まさにそのイメージ通りの成り行きだったので、「ハシズム」という言葉が流行したりして、日本人もそれなりに警戒心を持って眺めてきたように思います。

しかし、自民党政権の樹立によってなんとなく進行するファシズムに、一部のネット右翼は別にして、熱狂はありません。なにしろ、半分近くの主権者が投票を放棄しているのです。

人々は、無関心なまま、しらけムードの中で、おそらくはそうとは知らずに、ずるずるとファシズムの台頭に手を貸し参加していく。低温火傷のように、知らぬ間に皮膚がじわじわと焼けていく。

ましてや、政権を握った自民党は、かつて日本を長らく支配していた老舗政党です。日本人の多くは、「民主党政権以前に戻した」くらいのつもりなのでしょう。したがって危機感の温度も低く、進行しているのがファシズムであると気づく人すらごく少数です。危険を察知するセンサーが作動せず、警報音が鳴らないのです。恐るべきことに、たぶん安倍自民党は、こうなることを意識的に狙っている。そのことに気づかされたのは、麻生太郎副総理が13年7月29日のシンポジウムで発した、あの発言のお陰です。

今回の憲法の話も、私どもは狂騒の中で、わーっとなったときの中でやってほしくない。（略）静かにやろうやと。憲法は、ある日気づいたら、ワイマール憲法が変わって、ナチス憲法に変わっていたんですよ。誰も気づかないで変わった。あの手口学んだらどうかね。わーわー騒がないで。

この発言はもっぱら「失言」として扱われ、「政治家の言葉が軽くなった」などと総

括されたりしていますが、僕はむしろ彼の「本音」が表出した事件だととらえています。

もし主権者である私たちがそのような手法を見抜き、問題にし、本気で拒むならば、熱狂なきファシズムも進みようがありません。銃剣や戦車で脅されるわけてもなく、民主主義体制の中でファシズムが進行するには、私たち主権者による有形無形の協力が必要だからです。それがたとえ「投票に行かない」「政治に関心を持たない」という消極的な「協力」であっても、です。

では、私たちがファシズムの進行に、「何もしない」ことで加担している背景には、いったい何があるのでしょうか。

政治家は政治サービスの提供者で、主権者は投票と税金を対価にしたその消費者であると、政治家も主権者もイメージしている。そういう「消費者民主主義」とでも呼ぶべき病が、日本の民主主義を蝕みつつあるのではないか。

だとすると、「投票に行かない」「政治に関心を持たない」という消極的な「協力」によって、熱狂なきファシズムが静かに進行していく道理もつかめます。

（2018 年 11 月 21 日）